昭和戦前傑作落語全集

昭和戦前傑作落語全集

第五巻

講談社

昭和戦前傑作落語全集　第五巻
定価　一六〇〇円
昭和五十七年三月二十日　第一刷発行

発行者　三木　章
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
郵便番号一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京(〇三)九四五　一一一一(大代表)
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
©講談社一九八二年
*落丁・本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN 4-06-144525-1　(文芸)

昭和戦前傑作落語全集　第五巻　目次

不精風呂……七代目 金原亭馬生 5
夢八……五代目 笑福亭松鶴（五代目 古今亭志ん生） 17
チリトテチン……二代目 林家染丸 29
一日公方（くぼう）……三代目 三遊亭金馬 47
意地くらべ……四代目 柳家小さん 59
穴どろ……五代目 蝶花楼馬楽（林家彦六） 72
抜け雀……三代目 三遊亭金馬 85
お札（ふだ）泥棒……五代目 蝶花楼馬楽（林家彦六） 100
粗忽（そこつ）の転宅……柳家権太楼 112
垂乳根（たらちね）……四代目 柳家小さん 128
転宅（ひっこし）……二代目 桂右女助（六代目 三升家小勝） 142
虫づくし……七代目 金原亭馬生（五代目 古今亭志ん生） 160

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

将棋盤……三代目 三遊亭金馬 169
試験極楽……柳家金語楼 186
一ツ穴……八代目 桂　文治 200
とんかつ……柳家権太楼 217
押売り……三代目 三遊亭金馬 232
相撲放送……二代目 桂　右女助 248
にゅう……八代目 桂　文治（六代目 三升家小勝） 261
金婚式……春風亭柳条（五代目 柳亭燕路） 276
宿屋の富……四代目 柳家小さん 290
いかけ屋……桂　小文治 305
万病円……柳家権太楼 317
茶釜の喧嘩……七代目 三笑亭可楽 330

源太の産……四代目 柳家小さん 348
三方一両損……五代目 三升家小勝 363
女夫(めおと)貯金……柳家金語楼 379
つもり泥……七代目 金原亭馬生(五代目 古今亭志ん生) 392
解説……矢野誠一 404

装幀・及部克人

不精風呂

七代目 金原亭馬生
（五代目古今亭志ん生）

一番当今で変りましたのが、銭湯と床屋さんでございます。床屋さんというものは、従前は大がい職人でございまして、顔は男にやってもらわなければ気持が悪いというようなことをいったもので、又商品にしましても、足袋（たび）は足袋屋さんで買って、下駄は下駄屋さんで買わなければならないということになっておりました。現今（たいま）はそんなことはございませぬ。汁粉屋（しるこや）でライスカレーを売っていて、呉服屋でカツレツを売っているというようなことに変ってまいりました。床屋さんでもそうで、今日の理髪店というと、店の様子から、刈る人でも洋服に白いものを着て、眼鏡をかけてひげを生やしているのなどがあります。昔はみんな床屋さんはお職人、昨夜（ゆうべ）遊びに行って、面白くなかったというので、客の顔をあたっていながら、面白くないのと、眠いのとで、客の顔を切ってしまいます。

「ア、痛え〳〵、痛えじゃねえか」
「どうも済みません」
「お前の顔じゃアねえぜ、乃公の顔だ、血が出て来たじゃアねえか」
「ヘエ赤うございます」
「あたりめえだ」
　こうなって来ると、お客様も承知しなくなってまいります。そこへ行くと御婦人ばかりでやっている床屋さんがございます。こういうのは、少々疎相がありましても、あやまるのが早うございますから、穏かでございます。
「マア疎相をいたしまして、ちょいといまにきびを……」
「いいよ〳〵、構わねえ」
「それでも血が出てまいりまして……」
「いいってえことさ、私は血が多いんだよ、少し血が出てもらった方がいいんだよ」
「そうでございますか、御免下さいまし」
「アッ痛い〳〵」
「アレどういたしましょう、ちょいとあごのところを、つい切ってしまいまして……」
「いいよ〳〵、全体乃公はあごが長いんだ」

「御免下さいまし」
「アッ痛い」
「アレマアどういたしましょう、ちょいと唇のところを……」
「いいよ〳〵、全体乃公の唇は厚くっていけねえんだ――アッ、痛いッ」
「アレ御免遊ばして、つい鼻を剃り落してしまいまして……」
終いには顔がなくなってしまいます。何事も御婦人ですと事が円く治ります。
中には床屋の親方で大変お世辞のいいのがございます。お客の顔さえ見れば「イヨー色男ノ」などと申します。色男といわれて悪い心持はいたしませぬ、「乃公のことを色男といやアがった、サア表へ出て尋常の勝負をしろ」という人はございませんようで――
「今日は――」
「イヨーどうしました、向う横町の色男、寄っておいでなさい」
「今日はア」
「イヨーどうしました、こっちがわの色男」
「今日はア」
「イヨー一番隅の色男――イヨー共同便所のわきの色男――」
汚い色男があるもので、こういう色男が入ってまいりますと、奥には将棋盤もあるし、碁盤も

あるというような訳――又こういうところで差す将棋というものは、大してうまいのはございません。将棋はうまいのになってまいりますと、一番差すのに三日も四日もかゝったなどということがよく新聞に出ております。何々名人などという、そういうのになると、一つの駒を下ろすのも容易ではございません。中には菓子屋の縁台でやっているのがあります。立膝をして、巻煙草を持ちながら差しております。こういうところで差す将棋などというものは、大がい駒をしっかり手で握っていて、相手に見せません。

「お前の方の手はどういう手だ」

「何をッ」

「お前の手だよ」

「どんなだっていいじゃアねえか」

「見せろよ」

「今見せるよ」

手を開けようと思っても、あまり堅く握っていたので、手が開かなくなってしまいます。

「見ろよ、これだけだ」

手を開けたのを見ると、駒が汗をかいていて、ポーッと湯気が立っております。こういう人にうまいのはございませぬ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「何があるんだい」
「金が一枚に、銀が一枚、香が一枚に歩が五兵、それから王だ」
「何だ王というのは……」
「王を乃公が持っているんだよ」
「王などをどうして持っているんだ」
「どうしてって、取ったから持っているんだ」
「どこで取ったのだ」
「王手飛車取りと行ったところが、飛車が逃げてしまった、あすこで王を取ったのだ」
「アッしまった、王を取られると、この将棋はむずかしくなって来たぞ。オヤッ、お前の方の王はどうしたい」
「乃公の方の王――懐にしまってある」
こういうのになると愛嬌になって床屋さんが繁昌をいたします。
又銭湯となりますと、やはり従前と変ってまいりました。以前はというと、湯というものは長いものにきまっていたもので、昔から今に至るまで、長くはいっていたからといって、あなた長いから出て下さいとはいわない、一人五銭ときまっております。その代りちょいと顔を洗って出て来ても、乃公は短いから二銭に負けてくれといっても負けません。長いのと短いのとあるので

いいのだそうですな。以前は湯屋に二階などがございまして、二階へ上がるとお茶を出してくれる、羊羹をくれる……もっともお銭は取りますけれども……湯女といってきれいな女がいて、いろ〳〵なサービスをしてくれます。ですから湯女のいいのがいるところは、客がよけいまいります。江戸時代一番流行ったのが、神田の堀丹後守様のお屋敷の前にあった丹前風呂、丹後守の前だから丹前風呂、「オイ丹前風呂へ行こうじゃねえか」なんてんで、深川あたりから来ると、朝出て家へ帰ると日が暮れてしまったそうで、それでもかなり流行ったもので——湯屋の番台にきれいな娘などがいると、どうしてもお客がはいりますな。

「オイ、あすこの湯屋の娘は美い女だな」

「ウム美い女だな」

「この間釣を出しながら、有り難うございますといって、乃公の手にさわった。嬉しかったから、三度行ったら風邪を引いてしまった」

などというのがございます。当今では、銭湯も、だいぶいい普請になっておりますが、どうかすると場末に行くと、かなり不思議なのがございます。鏡などでも、自分の顔だか、他人の顔だか分らないようなハッキリしないのが置いてあるのがございます。番台にも変な親父がぶっ坐っているというようなところへ入ったら大変でございます。

「途中だけれども、どこかで一ッ風呂飛込んで、剃刀を借りて顔をあたって行こう——あゝこゝ

に湯があらア、入って行こう――今日はア」
「何だい、新聞屋さんかい、新聞屋さんなら晦日だよ」
「新聞屋じゃアないよ」
「あゝそうか、電気屋さんかい、電気屋さんなら晦日……」
「電気屋じゃアねえよ」
「あゝ瓦斯屋さんかい、勘定なら晦日だよ」
「瓦斯屋じゃアないよ」
「あゝ洗濯屋さんかい」
「諸方に借りがあるねこゝの家は――そうじゃアねえ、客だよ」
「あゝ客か、何だい」
「何だいということがあるかよ、湯へはいるんだよ」
「あゝそうか、入るなら遠慮なくおはいり」
「誰が遠慮をするやつがあるものか――湯銭はいくらだい」
「ナニッ――」
「湯銭はいくらだよ」
「湯銭はいくらといって、乃公の方で十円といっても、お前さん出しゃアしまい」

「あたりめえよ、十円なんて湯銭を出すやつがあるものか、どこだって湯銭は五銭ときまってるじゃアねえか」
「五銭だと知っていたら、五銭置いたらよかろう。なぜきまった値段を幾らだと聞くんだ。朝鮮の湯は四銭だそうだ、四銭ではいりたかったら朝鮮へ行きな」
「誰が朝鮮まで湯へ入りに行くやつがあるものか」
「それだったら幾らだなどと聞くな、知っていて胡魔化そうというのか」
「変なことをいうな——五銭出すから入れてくんねえ」
「オイお前さんお客だろう」
「そうよ」
「お客だったらなぜお客らしく入らねえ、五銭出すから入れてくれなどと頼むんだ、変な男じゃアねえか」
「ウフッ、叱られに来たようなものだな——手拭を貸してくんな」
「何をッ……手拭をどうするんだ」
「どうするんだって、中へ入るんだ」
「手拭を貸すのは衛生によくない、警察がやかましい」
「こゝの家もかなり衛生にいい家じゃアねえ」

「大きなお世話だ」
「手拭がなけりゃア困るよ」
「手拭がなかったら、シャツを脱いで、それで洗ったらよかろう、そのシャツがあか摺りにちょうどいいや、身体がきれいになって、シャツがきれいになる」
「馬鹿にするな、しようがないな——石鹸をおくれ」
「石鹸はないよ」
「何でも皆んなないんだな」
「お前の顔なんてえものは、石鹸で洗う顔じゃアないよ」
「じゃア何で洗うんだ」
「流しに落ちている軽石で洗いな、静かに洗いなよ」
「血が出るからか」
「そうじゃアねえ、石が減るといけねえから……」
「馬鹿にするな——剃刀があるか」
「自殺をするのか」
「自殺じゃアないよ、顔を剃るんだ」
「剃刀はねえが、出刃庖丁ならある」

「出刃庖丁で顔があたれるかよ」
「それからひげを剃ったら、あとへセメンを塗って置きなよ」
「セメンを塗ったらどうなるんだ」
「毛穴が固まって、ひげが出て来ねえ」
「草と間違えていやアがる——着物をどこへ脱ぐんだ」
「そこに紙屑籠(かみくずかご)があるだろう」
「エーッ紙屑籠……オイ屑屋にやるんじゃアないよ」
「あたりまえだ、屑屋だってそんな着物持って行きゃアしねえ」
「口が悪いな——おそろしい湯の中が暗いね」
「暗くったっていいじゃアねえか、本を読むんじゃアねえから……」
「湯の中で本を読むやつがあるか、それにしてもあんまり暗過ぎらア——オイ大変ぬる〳〵しているね」
「蚯蚓(みみず)を踏みゃアしねえか」
「蚯蚓……蚯蚓がいるのかい」
「飼ってあるんだ、踏んじゃアだめだよ」
「大変なところへ飛込んでしまった。ぬる〳〵して、危ねえ〳〵」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com